体 育 學 研 究

第 3 卷 第 4 號

昭和 34 年 6 月

H. KINOSHITA: A Study on the Books of *Play and Games*
in the First Half of the Meiji Era

明治前半期における遊戯に関する図書の研究

——『戸外遊戯法』を中心として——

日 本 大 学 木 下 秀 明

I 序 問題の提起

わが国の近代学校体育は「形式体操中心の時代」から「遊戯・スポーツ中心の時代」へと移行しているが¹⁾、この傾向は、すでに、明治時代に認められる。

すなわち、小学校の体育教科「体操」は、最初、明治6年には、体操だけで構成されていたが²⁾、14年には「初等科ノ初ハ適宜ノ遊戯ヲ以テ之ノ体操ノ意ニ充テ」られ³⁾、24年には「最初適宜ノ遊戯ヲナサシメ漸ク普通体操ヲ加ヘ」られたほか、「土地ノ状況ニ依リテハ体操ノ教授時間ノ一部若クハ教授時間ノ外」で「適宜ノ戸外運動ヲナサシメ」られるようになった⁴⁾。しかし、普通体操や兵式体操と異なり、適宜の遊戯・戸外運動と示されただけで、大正2年「学校体操教授要目」にいたるまで、具体的な文部省の規程は定められなかった。しかし、明治20年頃には『戸外遊戯法』の内容のごとき遊戯が行われ、また30年代には遊戯界が活況を呈している⁵⁾、上記「適宜ノ遊戯」にも、おのずから、20年頃、および30年代に、それぞれ特有の型があつた

と思われる。

そこで本稿では、この「適宜ノ遊戯」の型を解明するため、明治前半期における遊戯に関する図書を考察し、とくに学校体育史上、明治20年頃の遊戯の代表として重視されている『戸外遊戯法』について批判し、その意義を明らかにしたいと思う。

明治前半期における遊戯に関する図書を概観すると、最初(1)女兒の遊戯に関する図書(2)体育法としての戸外遊戯に関する図書(3)遊戯を含んだ体操に関する図書の3系統に大別されるが、これらが『Out Door Games』(F.W. Strange 著、明治16年—1883)を代表とする上級学校学生の体育法としての戸外遊戯に関する図書と、『戸外遊戯法——名戸外運動法』(坪井玄道、田中盛業編、明治18年—1885)を代表とする小学校児童の体育法の一つとしての簡易な戸外遊戯に関する図書の2種類を形成するに至っている⁶⁾ので、この経過を追いながら、考察をすすめる。

備 考

1) 明治前半期とは、学制頒布(明治5年—1872)

より、教育勅語の発布、学校令の改正(明治23年—1890)および、これに基づく諸規程の制定(明治23—25年)にいたるまでとする。

2) この期の学校体系は、事実上、初等教育機関と高等(専門)教育機関の2種類が中心で、両者を連絡する意味での、中等教育機関は、確立されていなかった。したがって、遊戯についても、小学校の児童と上級学校の学生を中心に考察してよいと思う。

3) 明治24年の規定では、「水泳」を「戸外運動」と区別し、図書についてみても、水泳は、ほかの戸外遊戯とやや異った取扱を受けているので、個別の例では水泳と「操舟」には密接な関係があり、また、水泳が戸外遊戯に含まれた場合もあるが、本稿では取扱わないことにする。

4) 引川文中の漢字は原文に相当する当用漢字を使用し、送りがなと句読点は原文のままとした。

5) < > 内は著者註である。

II 『戸外遊戯法』以前の遊戯に関する図書

『戸外遊戯法』以前の遊戯に関する図書(以下遊戯書と呼ぶ)は数冊現存しているが、いずれも、欧米の遊戯を翻訳・紹介したもので、日本古来の遊戯や、遊戯についての考察に関する図書は刊行されなかつたようである。

1. 女兒の遊戯書

文部省が刊行した『童女筌』(ファン・カステール訳^{註1}, 明治9年)は、最初の翻訳遊戯書であるが、この原典は『ゲアルス、アウン、ブック』<Girls' Own Bookの意>(エル・ファレンタイン著, 1873年, 「龍動」<ロンドン>)で、「人ノ父母タルモノ」を対象に、女兒の教育を目的として、遊戯・手芸等を広汎に収録したものであり、学校における遊戯指導に関する図書とは全く性格を異にする。しかし、この内容の一部には、簡易な活動的遊戯や、「クロケー」を含んでいるので、女兒の体育としての遊戯書の性格も示していたと考えられる。

なお、本書の一部を「抄訳」したのが『女子遊戯法』(吉川政興編, 明治13年)である。

註1 オランダ人で、英語と日本語を解し、文部省の各種翻訳事業に関係した。なお、後述百科全書では、「漢加斯底爾」と示されている。

2. 体育法としての戸外遊戯書

文部省は、欧米文化紹介の一環として、明治7年より百科全書の翻訳刊行に着手した。これは、専門教育程度の水準の図書であるが、『戸内遊戯方』『体操及戸外遊戯』の2冊を含んでいる。

『戸内遊戯方』(漢加斯底爾訳, 明治12年)は、百科全書の広告に「インゾール、エミューズメント」<Indoor Amusementの意>とあるごとく、室内娯楽を目的として「象棋」<チェスの意>「撞丸戯」<玉突きの意>「闘牌」<カードの意>「ダンシング」など、室内で行う各種の遊戯を示している。

『体操及戸外遊戯』(漢加斯底爾訳, 明治12年)は、上記広告に「ジムナスチック○アウト、オブ、ゾール、レクレーションス」<Gymnastic: Out of Door Recreationsの意>とあるごとく、戸外遊戯は戸外での気分転換法を意味している。この書の内容は、前半を「体操ノ修練」として、徒手・棍棒の体操のほか「リーピング」「ヴァールチング」「重量搬担ノ術」「逍遙及歩走術」などを示し、後半を「戸外ノ娯戯」として、「游泳」「スケッチング」「クリケット」「ゴルフ」「ヤッチング」「ボーチング」「蹴鞠」など、陸上競技類を除く各種スポーツ類を示している。

これによると、「遊戯」は娯楽・気晴しの意味で、実施場所の点から「戸内遊戯」と「戸外遊戯」に大別されたに過ぎない。この戸外遊戯の内容は、戸内では実施不可能な活動的遊戯で構成されており、この点で、体操と同様に体育法と考えられ、戸内遊戯と性格を異にしている。このため、編集の際、体操と戸外遊戯を合冊にしたのであろう^{註2}。

註2 「身体運動論」(杉田玄端訳, 明治13年, 東京学士会院雑誌, 2—9)では、「身体運動(ボヂ

リー、エクセルサイス) <bodily exercise の意>」として、冒頭で戸外遊戯に言及している。

したがって、体育法として戸外遊戯の価値を認めていたことは明らかであるが、戸外遊戯を「嬉戯」、体操を「修練」としたことは、両者の本質的な相異を示したものと考えられる。

しかし、本書が、上級学校の体育に与えた影響は不明であり、小学校の体育に無関係であつたことは、百科全書の性格、および、すでに体操伝習所(以下伝習所と呼ぶ)が設置されていた点から明らかである。

この期には、欧米の学術を導入するため、多くの外国人が上級学校の教師として招聘されている。彼らは、体育の教師ではなかつたが、学生の体育指導の面でも多くの貢献をしている⁶⁾。

その代表的人物である「東京大学予備門御雇教師」F.W. Strange は、明治16年、英文で『Out Door Games』を著した。

彼は、その序文で、教育には「mental exercise」と「physical exercise」の2面があり、後者は健康を目的として「gymnastics」と「out door games」の2種類の方法があることを説明、日本の学生が運動場を十分に活用しない理由として、運動場に適したゲームの知識がないことを指摘し、日本の学生のために、運動場に適した「out door games」を編集したと述べている。

この内容は、運動場に適した比較的簡易なゲームから、各種球技、陸上競技(練習法・競技法を含む)まで含み、水泳・ボート・スケートなど、運動場に適さぬ種類を除いている。

このように、『Out Door Games』は、上級学校の学生の体育法として、外国の戸外遊戯の紹介を意図した図書であり、さらに、下記の諸点から、最初の上級学校の学生を対象とした遊戯に関する図書(以下学生遊戯書と呼ぶ)

としての意義が認められる。

すなわち、ストレンヂが中心となつて開催した東京大学第1回運動会の賞品として本書を与えた点^{註3)}、「己ニ初等ノ教育」を修了した「中等以上ノ学童」(序)を対象に、「ストレンヂ」氏著「アウト、ドーア、ゲーム」(戸外遊戯)ト題セル書ヲ骨子トシ傍ヲ泰西ノ戸外遊戯ヲ記述セル諸書ヲ参酌折衷シテ抄訳輯録」(凡例)した『西洋戸外遊戯法』(下村泰大編、明治18年)によつて邦訳された点、および、同書が学生遊戯として、西洋の戸外遊戯を採用した理由を、下記のごとく、ストレンヂと同一の立場で述べた点である。

「我邦在来ノ諸遊戯ヲ觀ルニ 独楽競べ、羽突キ、風揚ゲノ類皆多少運動ヲ資クベシトイヘドモ其技余リ幼クシテ中年以上ノ若ニ適セズ又散歩、水練、馬乗り、船漕ギ、等ハ或ハ淡泊ニ過キテ少年ノ嗜欲ヲ喚起スルニ足ラズ或ハ場所ト時候トニヨリテ常ニ行フヘカラス或ハ費用ヲ要スルコト多クシテ實際ニ便ナラズ<中略>独西洋学問ノ法ヲ取リテ其遊戯ノ法ヲ取ラサレバ精神肢体ノ間ニ劳逸ノ權衡ヲ失シ忽チ不測ノ弊害ヲ来タスベキハ数理ニ於テ必然ノ勢ナリ」(序)

註3 田尾栄一氏蔵『Out Door Games』の表紙裏に、「横地石太郎誌」として、明治16年6月16日(土)の東京大学運動会に関する日記の抜抄がある。その中で、「三等賞トシテ「ストレンヂ」氏近著ノ Out Door Games 一卷ヲ受ク<中略>此一巻ハ実ニ右競技ニ於テ余カ得タル所ナリ」と記されている。

以上のように、欧米の戸外遊戯は、戸内遊戯と区別して、体育法と考えられ、『Out Door Games』によつて、学生遊戯書の形成をみたのである。

3. 遊戯を含んだ体操書

文部省が刊行した『体操書』(石橋好一訳、明治7年)は、伝習所以前の学校体操の指導書として重要な意味をもっている⁷⁾。

この内容は、体操のほか「棹飛びの法」や雲梯・棚など、陸上競技類や器械体操を中心に、

「随意運動」として、洋式の武術や「体操遊戯」で構成されている。この「体操遊戯」についての具体的説明はないけれども、『体操書』は遊戯に言及した最初の学校体育に関する図書だったのである。

伝習所が刊行した『新撰 体操書』（坪井玄道訳、明治15年）は、普通体操に関する最初の指導書であり⁸⁾、同時に、わずかではあるが、学校で行う遊戯をも具体的に示した最初の図書であつた。すなわち、豆糞について、「此演習ハ運動ノ功用ニ加フルニ滑稽状ノ歡樂ヲ以テスルモノニシテ最も児童及ビ男女学校ニ適応ス」（緒言）と娯楽的な要素を認め、「豆糞ヲ使用シテ競争ノ遊戯運動ヲ為ス事アリ」（P 212）と、その方法を示している。

このように、『体操書』『新撰体操書』が遊戯に言及したことは、学校における体育法として、体操とともに遊戯を認めていたことを示すものであり、遊戯の具体的内容が提示される過程にあつたことを示している。

『新撰 小学 体育 全書』（遊佐盈作編、明治17年）は、小学校児童の体育法として、「戸外遊戯」を具体的に示した最初の図書であり、『戸外遊戯法』の前年に刊行されている。

その凡例によれば、「本書ハ専ラ小学生徒ニ適切ナル簡易ノ運動法ヲ記シタルモノ」で、「上巻ニハ初等生徒ニ演習セシム可キ運動法ヲ説キ中、下ノ両巻ニハ中等及ヒ高等ノ生徒ニ授ク可キ諸種ノ体操術ヲ記載」したものである。この上巻は「第一編 戸外遊戯」で、「初等生徒ノミニ限ラス 廣ク中、高兩等ノ生徒ニモ施サン事ヲ望ム」のごとく、「戸外遊戯」を、小学校低学年を中心に、中・高学年にも適する教材と考え、「体操術」を中・高学年だけの教材と考えている。

すなわち、遊佐氏が示した「戸外遊戯」の内容は、『Out Door Games』や百科全書の「戸外遊戯」に比して、下記のごとく、簡易な遊戯を中心としている。

「ピン・ランニング」、線路伝ヒ、山上ノ大將、輪投ケ、蹴鞠、向側ノ叔母君、「ローン・ビリヤド」、蛙ノ飛越ヘ、屋隅戯ノ猫兒、蛇、字造り、日耳曼；捉第三人、豆糞投ケ第一、第二、第三、鬼、不倒翁、鬼狩、牡鹿、根突、循環基、「ホツケー」、随先導、風水平、競走、三脚競走、繩引き、手鞠、循環球

これらは、日本在来の遊戯に基く「風水平」<ホ馬乗り>のほかは、すべて外国より紹介された遊戯法で、「蛙ノ飛越ヘ」<Leap Frog>、「随先導」<Follow my Leader>「繩引き」<French and English>など、『Out Door Games』の中の簡易な戸外遊戯、「屋隅戯ノ猫兒」「日耳曼」<ゲルマン人の意>など、『童女笥』の中の活動的な遊戯、および『新撰体操書』の「豆糞投ケ」を中心に構成され、「蹴鞠」<Foot Ball>「循環基」<Base Ball>など、若干の球技類を除けば、簡易な遊戯ばかりである。したがって、この内容が、外国より紹介された3系統の遊戯、すなわち、学生遊戯書、女兒の遊戯書、体操書に含まれた遊戯に基くことは明らかで、「現今世上ニ行ハルル戸外遊戯」について、「体育ノ理法ニ適シ教育上ニ多少ノ効益ヲ与フルモノ僅少ニシテ」「小学ノ生徒ニ決シテ適當セザルナリ」と批判した遊佐氏の考えを反映している。

以上のように、本書は、体操とともに簡易な戸外遊戯を示した点で、正に『新撰小学体育全書』の名に価するものであり、単なる遊戯を含んだ体操書の域を脱した最初の小学校児童の遊戯に関する図書（以下 児童遊戯書と呼ぶ）と云えよう。

しかしながら、体育が伝習所を中心として展開していた当時に、遊佐氏が、伝習所の第1回出身者ではあつたものの、京都府学務課員であつたことから、この書の普及範囲は限定され、最初の児童遊戯書としての意義を、伝習所を背景とする坪井氏らの『戸外遊戯法』に譲つたと考えられる。

III 『戸外遊戯法』の意義

『戸外遊戯法一名戸外運動法』（坪井玄道・田中盛業編，明治18年）刊行当時には，学生遊戯については『Out Door Games』，児童遊戯については『新撰小学体育全書』がすでに出版されていたのであるから，『戸外遊戯法』を最初の学校体育としての遊戯書と云うことはできない。したがって，本書をもつて，明治20年頃の遊戯を代表するものと考えらるには，これ以外のより重要な根拠によらねばならぬので，この点について考察する。

1. 意図について

坪井氏らは，戸外遊戯に関する従来の図書の状況について，その緒言で，「此法＝関リテハ未ダ嘗テ一書ヲ著ハセシモノアルヲ見ス偶一，二ノ翻譯ニ係ルモノナキニアラザレトモ其法概ネ陳套ニ属シテ実地ノ用ニ足レルモノ甚ダ稀ナリ」と批判し，「現今欧米諸邦ニ行ハルル戸外遊戯法ノ諸書ニ就キテ其緊要ノ部分ヲ抄訳シ傍ラ平素余輩ガ教授セル各種ノ方法中特ニ本邦ノ習俗ニ適スルモノヲ蒐集シテ」本書ヲ編纂したのである。したがって，本書刊行の意図が，最初の実用的な戸外遊戯に関する図書であつたことは，明瞭である。

この戸外遊戯は，「身体練成ノ法ハ元来合式体操（軽運動）ノミヲ以テ足ルモノニ非ス又併セテ戸外運動（遊戯法）ヲモ研究セザルベカラズ」のごとく，軽体操とともに体育法の一つと考えられ，「戸外遊戯ノ利益タル當ニ身体ノ強健ヲ増進スル而已ナラズ亦大ニ心神ヲ爽快ニシ優暢快活ノ氣風ヲ養成シ児童体育上実ニ欠ク可ラザルノ一科トス」のごとく，小学校児童の体育法の一つとして，体操とともに高く評価されている。

しかしながら，実施面では，「教場ニ於テ日日定時ノ体操ヲ行フノ外時時庭園等ニ於テ戸外遊戯ヲ演習シ生徒ヲシテ随意ニ其娛樂ヲ取り専ラ優暢快活ノ氣象ヲ涵養セシメンコト是又緊要ノ一事ナリ其方法ノ如キハ載セテ戸外

遊戯法ニ詳ナリ」（『小学普通体操法』（坪井・田中編，明治17年）第八体操演習示要47丁）のごとく，体操を日課と定めたのに対し，戸外遊戯を「時時」行うように考えていたに過ぎない。

このように坪井氏らが，小学校児童の体育法として軽体操と戸外遊戯の2つを考え，遊佐氏が体操と遊戯を併せて『体育全書』と称したのに対し，『小学普通体操法』と『戸外遊戯法』に分けて示したことは，伝習所主幹西村貞が『戸外遊戯法』に寄せた「序」に明らかである。すなわち，

「世ノ体操遊戯ノ真価ヲ悟レル者殊ニ幼童壯丁ノ教育ニ任セル者両君前後ノ著ニ拠リテ以テ実施ノ歩ヲ進メテハ独体育ノ責任ヲ完クスルノ替アルノミナラス又国戯ヲ産出スル種子ヲ播クノ余榮アラン」

2. 内容について

この内容は「鹿ヤ鹿ヤ」にはじまり「操櫓術」に終る21種類で¹⁰⁾，簡易な戸外遊戯から，高度に組織化された戸外遊戯まで含んでいる。このため，児童遊戯書としての意図と矛盾する点があり，明治21年には，大改訂を行い，『改正戸外遊戯法』と改められている¹¹⁾。

『戸外遊戯法』の内容は，前述のごとく，欧米の戸外遊戯法に関する図書の抄訳と，坪井氏らの実施していた戸外遊戯で構成している。すなわち，当時伝習所の参考書であつた『遊戯運動法』（ロートレージ，1868年，ロンドン）『操櫓法』（ワルド・ロック，一，ロンドン）の二著と，伝習所で実施していた「戸外運動」と考えられ，本書中の「トロコ」「フートボール」「クロッカー」「ベースボール」「操櫓術」は伝習所で実施したものである¹²⁾。

このように，本書は比較的高度に組織化された戸外遊戯が多く，児童遊戯書としては適切でなかつたと云えよう。このため，明治21年には簡易な遊戯を中心とするように改訂を行い，はじめて，児童遊戯としての意図と内容とが一致したと考えられる。

3. 影響について

当時の体育が伝習所を中心として展開していたことは云うまでもない。

著者の一人坪井氏は、この伝習所の教員として、最初はリーランド¹³⁾の通訳に過ぎなかったが、リーランドの帰米後、伝習所の中心的存在となり、彼の教えを受けた卒業生が各府県の体育指導の中心となつたのである¹⁴⁾。したがって、坪井氏と第1回出身者で、伝習所の教員となつた田中氏が「学友中島、中村、細井、山内ノ諸氏」^{註4)}(凡例)の協力によつて編纂した「坪井氏蔵板」『戸外遊戯法』が、全国的な学校体育上の指導書となつたこと、および、制度に示された小学校の「適宜ノ遊戯」の模範となつたことは明瞭であろう。

註4 中島・中村氏は第1回卒業、細井氏は第2回卒業で卒業後伝習所教員を勤めた人であり、山内氏も恐らく第2回卒業で教員を勤めたと想像される。〈文部省年報中より〉

また、『戸外遊戯法』以後には、「小学生徒の身体発育の程度を量りて之に適當なる遊戯法を蒐集」(凡例)した『簡易戸外遊戯法』(岡本岱次郎編、明治19年)『小学遊戯法』(相沢英二郎、許斐氏春編、明治19年)『簡易遊戯法』(広瀬伊三郎、明治20年)など、相次いで児童遊戯書が刊行されている。これらは、外国の戸外遊戯を主体に、これに類した日本在来の戸外遊戯を加えた簡易な戸外遊戯を中心に構成されているが、同様の傾向が『改正戸外遊戯法』にも認められるように、簡易な戸外遊戯が、明治20年頃の児童遊戯書の特色となつている。

このような、『戸外遊戯法』以後に認められる児童遊戯書の傾向は、明治15年、伝習所が『新撰体操書』を刊行して以来、これに基いた体操書が増加した傾向と全く同一であり、『戸外遊戯法』以後の児童遊戯書が『戸外遊戯法』に基いていることは明瞭である。(第1表)

第1表 体操・遊戯書刊行冊数

明治年	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
体操書	1	1	1	1				1			3	3	1	3	1	3		1	1
遊戯書					1			1	1			1		2	2	3	3	4	
体操・遊戯書								1					1						
兵式体操書			1										1	1	3				

備考

- 1) 野口岩三郎(昭28)体育書解題、今村嘉雄(昭26)日本体育史附録体育文献、および著者の調査に基いて作成した。
- 2) 体操書には、体操図類および体操に関する「体育」書を含め、伝習所規則等を除外した。
- 3) 遊戯書は遊戯のみに関する図書を含む。
- 4) 体操・遊戯書は「体操及戸外遊戯」、「新撰小学体育全書」を含む。
- 5) 兵式体操書は体操教範・隊列運動を含む。

したがって、『戸外遊戯法』は、伝習所を背景とした全国的な普及、および、本書以後の児童遊戯書に与えた影響の2点に、顕著な影響が認められる。

4. 意義について

以上のごとく、『戸外遊戯法』は、小学校児童の体育上、体操とともに実施すべき遊戯書

として刊行されたが、『新撰小学体育全書』に比して、内容の点で児童遊戯書としての適切さを欠き、出版時期の点で遅れたように、この2点では、最初の児童遊戯書ということはいえない。

しかしながら、伝習所を背景とした全国的な普及、および、その後の児童遊戯書に与え

た影響の2点では、『新撰小学体育全書』の遠く及ばぬところであり、この2点に『戸外遊戯法』の意義が認められる。

したがって、『戸外遊戯法』中の簡易な遊戯をもつて、わが国最初の児童遊戯書を代表し、かつ、明治20年頃の「適宜ノ遊戯」の型の模範を示したものと云えよう。

IV 結 語

以上のように、明治前半期の遊戯に関する図書は極めて小数で、いずれも、外国の遊戯の翻訳・紹介であつた。

これらは、最初、(1) 女兒の遊戯書、(2) 体育法としての戸外遊戯書、(3) 遊戯を含んだ体操書の3系統からなり、まず、明治16年に、体育法としての戸外遊戯書に属する『Out Door Games』によつて、学生遊戯書が、戸外

遊戯を特色として形成され、ついで、明治17年、遊戯を含んだ体操書に属し、他の2系統の影響を強く受けた『新撰小学体育全書』によつて、簡易な戸外遊戯が示され、翌18年に刊行された『戸外遊戯法』中の簡易な戸外遊戯を特色として、児童遊戯書が形成されるに至つた。(第1図参照)

したがって、『戸外遊戯法』中の簡易な遊戯をもつて、わが国最初の児童遊戯書を代表し、かつ、明治20年頃の「適宜ノ遊戯」の型の模範を示したものと云えよう。

このように学生遊戯書と児童遊戯書が形成されたことは、上級学校と小学校の遊戯がそれぞれ独自の特色をもち、独自の展開を示すに至つたことの主要な一因をなしたと考えられる。

第1図 明治前半期の遊戯書系統図

備 考 1) —→ 直接影響の認められる関係

2) - - - -> 間接的に影響の認められる関係

参考文献

- 1) 今村嘉雄 (昭 26) 日本体育史, p. 10~12.
- 2) 明治 6 年文部省布達 76 号 (5 月 19 日) 小学教則 3 章
- 3) 明治 14 年 同 達 12 号 (5 月 4 日) 小学校教則綱領 25 条
- 4) 明治 24 年 同 省令 11 号 (11 月 17 日) 小学校教則大綱, 11 条
- 5) 今村嘉雄, 前出, p. 116, 192~3.
- 6) 同 上 p. 78~85.
- 7) 著者 (昭 32) 明治時代の学校教育における体操観, 体育学研究, Vol. 2, No. 6, p. 237,
- 8) 同 上 p. 240.
- 9) 今村嘉雄, 前出, p. 116.
- 10) 同 上 p. 117~8.
- 11) 同 上 p. 117~8.
- 12) 同 上 p. 130~34.
- 13) 同 上 p. 90
- 14) 著者 (昭 32) 体操伝習所における教員養成について, 体育学研究, Vol. 2, No. 7, p. 223~4.